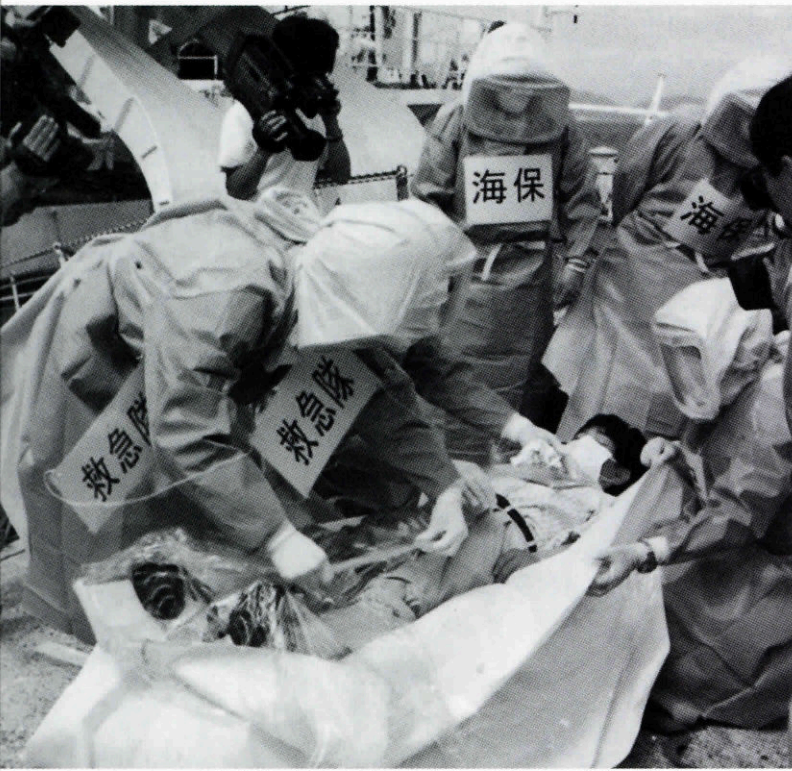


# 県内初・長門市内で200人が参加 SARS想定訓練

5月28日、長門市内で新型肺炎（重症急性呼吸器症候群（SARS））の患者発生を想定した大規模な訓練が実施されました。

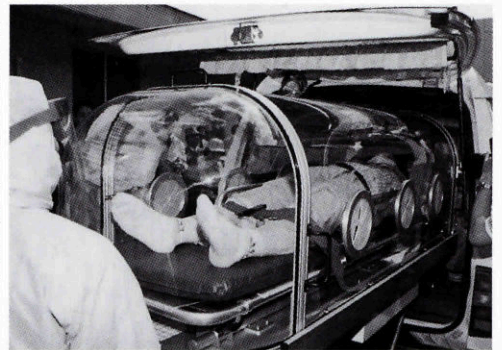
この訓練は、SARS発症時に関係機関が連携して適切な対応がとれるよう山口県が県内では初めて実施したもので、県長門健康福祉センターや仙崎海上保安部、長門地区消防本部、長門警察署、長門総合病院など24の関係機関から約200人が参加しました。



巡視船「かつら」から担架に移される訓練の様子

訓練は、SARSが流行している地域を出航した船が日本海沖で遭難、仙崎海上保安部巡視船が乗組員を救助して仙崎港に帰る途中、保護された乗組員の一人が発熱と咳を訴え、急速に病状が悪化。診察の結果、SARSの可能性があると想定で行われました。仙崎の青海島シーサイドスクエア・野外ステージで行われた開会式では、石津敏樹山口県環境福祉部長が主催者を代表して「備えあれば憂いなし。この訓練を機会に関係機関のさらなる連携が図られることを期待しています」とあいさつし、訓練が開始されました。青海島シーサイドスクエアの仙崎海上保安部巡視船係留桟橋では、感染を防ぐための防護服を着用した県長門健康福祉センター職員が検疫調査用具や消毒用具などを持って巡視船「かつら」に乗船しました。患者を診察したところ「SARS疑い例」であると診断されたことから、長門地区消防本部の救急隊員が防護服を着用して駆けつけ、マスクをした顔だけ残

して患者の全身を透明のビニールシートで包み、救急車で長門総合病院感染症病棟に搬送しました。長門総合病院では、防護服着用  
の医師や看護師、放射線技師らが待機しており、到着した患者を病室へ移送し、胸部レントゲン撮影などが行われました。診察の結果、患者の容態は「SARS疑い例」から「SARS可能性例」と診断され、第二種感染症指定医療機関への移送、収容が決定。すぐに県長門健康福祉センターを通じて防府市の県立中央病院に移送の手配が行われました。その後、県立中央病院から感染症患者移送用陰圧装置（アイソレーター・アクリル製の透明カプセル内部の圧力を調整して菌が外部に漏れない装置や空気清浄装置を装着）を搭載した移送車が到着し、職員らが手際よく患者を装置へ収



患者移送用陰圧装置で移送される様子

容し、県立中央病院に向けて長門総合病院を出発しました。この間、巡視船「かつら」では残った乗組員の検疫や船内の消毒が実施され、長門総合病院でも救急車の車内や搬送機器、救急隊員の衣服などの消毒が念入りに行われました。

今回の訓練について、長門総合病院の藤井康宏院長は「患者発生時には、まん延を防ぐことが重要だが、関係機関の連携がうまくできていました」と講評し、「SARSに対しては、過度の不安や恐怖感を持たず、感染が疑われる場合には、すぐに県の健康福祉センターに連絡してほしい」と話していました。

訓練後、長門総合病院では、防護服の装着・脱衣、処理方法や患者移送用陰圧装置の取り扱い方法などを学ぶ講習会がありました。



患者移送用陰圧装置の取り扱い方法を確認する参加者